

要約

本研究においては、SC への被援助志向性が高まる要因を検討しモデル作成を行うとともに、高校生の SC への被援助志向性を高めるプログラムを作成・実施しその効果検討を行うことを目的とした。予備調査として大学生 100 名を対象として、情動コンピテンス・SC へのニーズが SC への被援助志向性に影響しているか検討した。ニーズ尺度 3 因子・情動コンピテンス尺度 3 因子の計 6 因子を説明変数に被援助志向性の 2 因子をそれぞれ目的変数とした重回帰分析の結果、高校生のニーズ尺度の「心理・社会的ニーズ」因子と情動コンピテンス尺度の「情緒の制御・調節」因子が被援助志向性尺度の「SC の肯定的側面」を説明していた($R^2=.21, p<.05$)

予備研究より得られた結果から、主に「SC はどんな人物であるか」、「SC にはどのようなことを相談してもよいか」、「自分自身の気持ちに気づく」ことをテーマとしたプログラムを作成し高校生 192 名を対象に研修会を行った。プログラムによる影響を測定するために、プログラム実施前(Pre 地点)、プログラム実施直後(Post 地点)、3 ヶ月後(Follow 地点)の 3 点において質問紙調査を実施し効果検討を行った。Pre 地点における SC の肯定的側面、心理社会的ニーズ、情緒の制御・調節の得点を 3 群に分け、それぞれの群の得点が Post、Follow 地点でどのように変化するか検討するために 1 要因被験者内計画の分散分析を行った。その結果、Pre 地点での得点高群・中群では Post、Follow 地点では有意に得点が減少しており、低群では Pre 地点よりも Post、Follow 地点で得点が上昇していた。

この結果より、もともと SC に対して被援助志向性やニーズが低く、自分自身の感情を制御することが苦手だった生徒は、プログラムによりそれらのニーズ・能力を高めることができたと考えられる。一方で被援助志向性・ニーズ・情動コンピテンスが元々高い生徒に対しては効果的が見られず、今後高校生一般に使用できるプログラムを検討していく必要があると考えられる。